

3.11 ソレカラ

～障害者・
福祉職員の
「あの日」と
「ソレカラ」～

◎伊藤純子さん（ワークショップひまわり 支援係長／当時40代）

行き場がなかった利用者も、家族を失った職員も、 皆がひまわりを心の拠り所にしていました。



— 利用者の笑顔が親たちを元気づけた。 —



— ワークショップひまわり —

再開

ひまわりの存在が、利用者とその家族、そして職員の心の拠り所となる。

3月12日、伊藤さんたちはひまわりに戻りましたが、福祉避難所の認可がなかったため、しばらく救援物資が届きませんでした。通所事業所には毛布も寝具もなく、職員の自宅から布団を集め、寝床を用意しました。また、阪神・淡路大震災を経験した神戸の方が「避難所に指定されず人が集まっている場所が一番苦労している」と、いち早く食料を持って駆けつけてきてくれました。

震災後も混乱が続き、電気も水道も復旧しない状態でしたが、ひまわりは被災から1ヵ月も経たないうちに活動を再開しました。その大きな理由は、1人でも頼ってくれるなら、利用者が集まれる場を早く再開したいという気持ちからでした。利用者は再びひまわりに通い始め、「ひまわりがあるから頑張れる」という言葉をもらうようになりました。そして職員たちは、自宅が被災したり家族を亡くしたりした方がいたにもかかわらず、利用者の前で涙を見せてはいけなく、笑顔でいようと頑張っていました。事業所に関わる誰もが、ひまわりを拠り所にして、1日1日を踏ん張って生きていました。

電気が復旧してから、伊藤さんは震災後に撮り溜めた利用者の笑顔の写真をDVDにまとめて利用者の家族に配りました。当時、ご父兄は多くの“死”を目の当たりにして、自分たちがこの世を去った後の利用者の行く末を憂慮して、伊藤さんに相談に来ては涙を見せるような状態でした。日々の生活が辛い中、ご父兄から「DVDにどんなに救われたか」という言葉をもらいました。利用者の笑顔が、張り詰めた毎日の中にほっとできる瞬間をもたらしてくれたのです。

地域で

地域の一員として利用者が生き活きと暮らせることを目指し、活動を続ける。

困難を抱えながらも活動を再開し、少しずつ平穏を取り戻していったひまわり。現在は、震災前と同じようにパンや焼き菓子の製造等を再開しており、気仙沼市内の企業や行政機関の17ヶ所をはじめ、インターネット等でも販売をしています。

伊藤さんは製造しているパンや焼き菓子を、障害者が健常者とつながるためのツールとして活用しているといいます。笑顔で商品を配達をする利用者の姿を見た方々が、「障害を持っていてもこんなに明るく笑えるんだ」「ひまわりの子たちっていつも楽しそうだ」という発見を通して、障害に対する偏見が少しでもなくなることを望んでいます。「利用者さんたちは、ひとりでは絶対に生きていけない方々。でも誰かの手助けが少しでもあれば輝けるんですよ。笑えるんですよ。それを知っていただきたいんです。ちょっとずつ輪を広げて1人でも彼らのことを知っている人を増やして、皆がこの気仙沼という地域で暮らしやすい基盤を作っていきたいと思います」。

さらに伊藤さんは、地域の防災においてもコミュニケーションが最も大切だと話します。「利用者さんは、職員や家族がいなくなっても、一度でも顔を見たことがある人にはSOSを出しやすいと思うんです。ろうそくや電気も大事ですが、人に“助けて”と言えること、それと何があっても安心して集まれる場所があること。それが一番防災につながるのだと思います」。